

田上 時子のエッセイ

今夏の怖い話

～日本人男性・タイの代理母出産事件～

今年 8 月、24 歳の日本人男性が、タイで代理母出産を通じて 20 人を超える乳幼児を出産させ現地の警察官が捜査をしている事件で、警察は当初人身売買を疑ったが、この男性が IT 企業創業者の御曹司で、「1,000 人出産計画」という壮大な野望もあったことも浮上し、犯罪の可能性は低いとしながらも、不可解な事件として捜査を続けている。10 月末現在、男性はタイ警察との直接事情聴取に応じたというニュースはない。

海外メディアは「奇妙な事件」と報じ、「家族」「代理母出産」などを考えさせられる騒動になっているが、それにしても、人間がここまで傲慢になれるものかと言葉を失う。そして多くの疑義を感じる。①貧困女性が報酬を得るために代理出産を行うことをどう考えたのか、②卵子提供女性は誰なのか、③出産の母は誰なのか、④父親自身は子育てをするつもりなのか、⑤代理出産者の身体へ危険のリスクをどう考えたのか、⑥誰がどこで子どもを育てるのか、⑦子どもにアイデンティティの混乱があった場合どうするのかなど等。

子どもを持つ選択をするなら、里親や養子縁組制度を活用すればいいものを、男性中心主義的な血縁幻想に由来する代理出産によって、女性の身体が男性に支配される事態を苦々しく思う。

代理出産は問題が多すぎる。また、今回の事件では、それぞれの子どもの養育を誰が行うのが気になる。一体、出産後の「子どもの心の育ち」

をどう考えているのか。

育児書らしき書き物が一般庶民に広まるのは、江戸時代からだが、江戸時代の育児書を読む限り、子どもは授かりもので、「七歳までは神の子」「子どもは国の宝」といわれ、大切に育てられたことが分かる。

明治初期に来日し、東京から北海道まで旅行したイギリス人、イサベラ・バードは、『日本奥地紀行』で、常に子どもを抱いたり背負ったりして、歩く時には手を引いてやる。子どもの遊んでいる様子をじっと見守り、時に一緒に遊ぶ様子を見て、「私は、これほど自分の子どもを可愛がる人々を見たことがない」と書いている。

江戸時代には純然たる育児書に限らず、人の道を説いた著作には必ずといってよいほど「子育て論」が含まれているのは、子育てに人の道の心得を外せないとする考えからだろう。

天保 15 年 (1844 年) に刊行された『養育往来』は子育てに関する親の心得を説いており、第 10 条 (子育ては試行錯誤の連続) には、「本当の子育ては体験してはじめて実感できるものだが、真心で子どもに向き合えば、それほどの外れにはならない」とある。

「子育て」から「子作り」と、新語が生まれる現代社会の背景の中で猟奇的な事件が毎日のように起こる。

人間を育てるという大仕事に、ぜひ江戸の知恵を生かしたいものである。